

序
章 生命素との邂逅

九十～百歳は夢ではないとの老婦人

世界的な大恐慌が始まったと思われた二〇〇八年の暮れも押し詰まつたある日、関西の八十六歳の老婦人から次のような報告をいただいた。

「先生、今年は本当にありがとうございました。生命素のおかげで一日たりとも具合の悪い日はなく、元気に過ごせましたことは、言葉では言いつくせぬ、ありがたいことでござります。この調子だと、九十～百歳は夢でないような気がします。自分のことは全部自分で致します。力余つて店のことまで手を出すと、「かまうな……」と娘に叱られています。二〇〇六年～二〇〇七年は寝つきり老人で、死にたいと言つて家人を困らせていた私が、こんなに元気に、顔色もよく、人様から顔に全然ケン（註＝険——とげとげしい表情）がなくて幸せそうと言われます。うれしいです。生命素のお蔭です。まずは御礼と共にご報告

まで申し上げます』

私はこうした“生命素”的つもない働きを本にしようと思つていた矢先だつたので、冒頭に原文のまま掲載させていただいた。この数行のご報告の中に、生命素の働きについての私の曰く言い難い想い——いのちもうけのありのままを、淡々として知らせてくださつたからである。

生命素をのんでいると、九十、百歳はおろか、「いつまでも、永久に生きられるのでは……？」との声をよく耳にする。私はいつもシリアルス（嚴爾）に受け取つてゐる。そう思われるほど、生命素によつて生命が高揚するのである。若返り、相貌（顔かたち）が良くなる。そして、運勢まで良くなる。なぜか？ そのわけを、この本の全文にわたる実例に触れながら物語りたい。

確かないのちもうけ——生命素

世にいのちもうけ以上の儲けはない。それが、大いなる陽（氣）である太陽エネルギーの直接攝取に依つて確かなものになった。

そんな大それたことがなぜ言えるのか？ と言うと、ノーベル賞に輝いたドイツの細胞生物学者オットー・ワールブルクが、生命の基幹物質が植物のみどりの色素——葉綠素の中に存在すると予見してからすでに七十年の歳月を費している。それは太陽の光の粒子であることを見たのは、近年目覚ましい進歩を遂げた量子力学である。私は図らずも、その生命の基幹物質——生命素と巡り合つたからである。

人は良かれ悪しかれ、人やモノとの邂逅（かいこう巡り合い）が大きな転機となつて、その後の人生が決定づけられることがある。私の場合はとてもない自然の抽出物との巡り合いが、私の専門とする東洋医学（漢方）の臨床のうえに、多大の治験（効果の著し）をもたら

らしてくれたのである。

この巡り合いは、私の密かな温故知新（故きを温ねて新しきを知る）に依るものである。

この場合の「故き」とは、大自然の生命消長（消滅と長久）の理法である「陰陽」の法則であり、「新しき」とは、生命は物理量の最小単位である素粒子——太陽の光量子に由来するとの量子力学の教えである。

こうして巡り合つたそのモノは、見た目にはただのエメラルド・グリーンの液体であるが、暗室で紫外線ランプの光に曝すと真紅の蛍光を発する。この緑の液体を粉末にしたものは希釈されて萌葱色もえぎをしている。私はこの粉末を“生命素”と呼び馴れている。このモノの分子の構造からして、また、その働きからして、まさしく生命素と呼ぶにふさわしいものだからである。

粉末にした生命素は原液より淡い色調であるが、その本質である太陽の太いなる陽あかしを証する真紅の陽性色は、原液に退けひけをとらない鮮やかさである。これは希釈することで却つて分子運動が活発になるホメオパシーと呼ばれる現象である。

分子や原子の世界は目には見えぬど形のある世界である。それよりも小さな量子の世界は、形なくして働きのあるエネルギーの世界である。それは取りも直さず、東洋医学の理

論体系からはやはり形なくして働きのある陰陽の世界である。森羅万象の消長は陰陽の法則に依る。生命の消長も例外ではない。

生命消長の大自然の理法——陰陽

「森羅万象陰陽ならざるはなし」とも、「宇宙万物は陰陽より成る」ともいう。宇宙のあらゆる存在が常に相対する事象または存在をもつてゐる。たとえば昼があれば夜があり、夏あれば冬あり、生あれば死あり、動あれば静あり、温あれば冷あり、燥あれば湿があるというようだ。そして、これら相対するものは相互に盛衰、消長があり、交代、転換、変遷を繰り返している。

陰とはいわゆる陰気なもの、色でいえば七色スペクトルの緑、青、藍、紫に白が加わる。温度でいえば寒冷。明暗でいえば暗。燥湿でいえば湿。軽重でいえば軽。長短でいえば長。太い細いでは細いなど。物理的には遠心力の働いている状態をいう。

陽とはいわゆる陽気なもの、七色スペクトルの黄、橙、赤。それに黒が加わる。以下温暖。明るい。乾燥。重い。短い。太いなど。物理的には求心力の働いている状態をいう。このように、この世界に在るものすべてに陰陽の理法が働いている。生命の消長——生死ももちろん例外ではなく、この大自然の理法のもとに在るのである。

生命力の衰え——虚労

ところで、生命消長の「消」を示すのに、「虚労」と呼ばれる漢方の用語がある。これは読んで字の如く心身が虚し、つか勞れている状態を言う。何病であれ、病名などに関係なく、心身の落ち込んだ状態である。

心身の落ち込みは誰にでもあるありふれたことである。たとえ生まれつきは丈夫であっても、加齢と共にやがてそうなるし、ましてや生まれつき虛弱な体質にあつては、はじめから、疲れやすいとか、意欲に乏しいとか、生老病死の生の苦を負うて生きているという

ことになる。その途上で病むこともあろうし、仕事や生活のうえのストレスが積もることがあると、心身の落ち込みはいや増す。

虚労と似た語に「疲労」があるが、これは単なる疲れであつて、一晩寝たら取れてしまふ。ところが、虚労となるとそうはいかない。いくら休んだとて治るものではない。休養すれば治るのは疲労、いくら休んだとて治らない、寝ても覚めても四六時中つきまとつているのが、虚労ということになる。

それというのは、虚労は特定の臓器や器官およびその系統の機能減退による生命力の虚しいさま、勞れたさまだからである。

消化器系統の虚労の特徴としては、疲れやすい。意欲がわかない。食味がない。食欲がない。熱物を好む。口中に白沫がたまる。手足がだるい。言語が弱々しい。眼に勢いがない。脇に当たつて動悸する。脈が散大で力がないか弱くて触れにくい。夏まけする。といつたことがある。

循環器、呼吸器系統の虚労は、口の燥きが強い。皮膚が燥いてカサカサした感じ。手足が煩てる。息つきが熱い。動悸する。息切れする。脈が速く結滞するといったことがある。

ご老人に多い腎・泌尿器系統の虚労には、疲労倦怠感が強い。排尿の異常（頻尿、多尿、尿の出しぶり、切れが悪い。夜間尿が多い。失禁など）。手足が冷える。煩てることもある。口が燥きがち。下腹部が脱力している。反対にすじばつているものもある。腰痛があることが多い。

こうした虚労には生まれつきのものもあるし、生まれつきは丈夫であっても、長い間の生活習慣からそうなつたものもある。また、病気が延々として癒えないのは、そのおもとに虚労があつて、免疫力が低下しているからである。老衰は虚労そのものであり、死は虚労の果てである。

こうしてみると、虚労は幼小児からご老人まで幅広くあり、虚労からはさまざまな病気が派生的に起きている。たとえば小児喘息や白血病はその典型的なものである。反対に、病気が先にあつてその結果として虚労に陥っていることもある。たとえばがんの末期をはじめ、心臓病や脳卒中の後遺症など、病名こそ違え、多くの慢性病の初期の大部、末期のすべてが、虚労の病なのである。

ところで、こうした誰もがいつかはそうなる虚労は、「陰陽の物指しで測ると「陰多くして陽少なし」の現象なのである。虚労の甚しきは「亡陽」である。こうした陽不足の体

——虚効が幼小児から老人まで幅広くあつて、生老病死の四苦のファクター（要因）となつてゐる。

なのに、現代医学にしても東洋医学にしても、虚効から脱け出るための決め手となる治療法を持ち合わせていない。この故に、人は生老病死の四苦から脱け出ることができないでいると言つてよい。

太陽の大きいなる陽の摄取——補陽

こうした陽不足や亡陽の体に、陽（氣・エネルギー）を補うことを「補陽」と言う。虚効から脱け出るには、陰陽の法則からして不足の陽を補うのが、生命の消長を左右している大自然の理法に適うのである。

その補陽は、これまで漢方の生薬（草根木皮）や食（陽性食）によつて行われてきた。前者は東洋医学に、後者は古来の食養（食餌療法）にそれぞれ基づくものである。

ところが、現代医学（西洋医学）にも、陽不足の生命体にその不足の陽を付与するという概念そのものがない。生命を「消」から「長」に転ずる原動力は、草根木皮の生薬や食材に含まれる栄養成分ではなく、その原植物がとらえている太陽エネルギーなのである。ビタミン学説やカロリー学説が病気の治療に取り入れられていて、生命的の消長に直結している補陽が^{ほか}外（囲いの外）にあるのは、何としても腑に落ちないことである。

だからといって、古きから補陽に用いられているさまざまな漢方の生薬にしても、古来からの食養の食材にしても、体内で燃焼されてはじめてエネルギーが解放される太陽エネルギーの間接摂取である。これでは治病に当たっても、健康寿命を延ばすにつけても、一爻不足^{いっしょく}なのである。「一爻不足」とは易^{えき}の用語で、「それはそれでよいのだが、いまひとつ足りない」の意で、運勢を開くための陽気の不足を言つたものである。

病気の場合も同じことが言える。それは難しい病気に罹つているときや、何病であれ延々として癒えないときである。また、病気とは言わなくとも老衰や虚弱体质の場合である。そして生命の危ういときである。これらはすべて虚勞であり、「陰多くして陽少なし」や「亡陽」の現象である。間接摂取では、何としても一爻不足なのである。

このようなとき、虚労から回生の突破口となるのが太陽の大きいなる陽の直接摂取である。それは励起^{れいき}といふ新しいかたちでなされる。「励起」とは分子や原子が安定な状態から高エネルギー状態に移行する量子力学的な現象を言う。体内に直接取り入れられた太陽エネルギーが、燃焼を必要とせずに励起に依つて直ちに解放される。生命素の働きのメカニズム（仕組み）である。

そもそも同じ太陽エネルギーの取り入れであつても、間接と直接では生命体に与えるインパクト（影響）に大きな開きがある。間接摂取は緩やかに、直接摂取は急に働く。ただし、急と言つてもそれは生命を生み育んでいる大自然の摂理としての働きであるから、優^{すぐ}やきに優しい。あたかも内からなる日向ぼっこのぬくもりである。

太陽の大きいなる陽の優しさを孕む急なる働き……。それは虚労の体を陰から陽へ直撃的に転換させる。量子力学で言う原子転換である。この働きこそ有事のときの救命・救急の働きとなる。また、この働きに依つて、これまで手をこまねいていた難症や老衰に確^{しづか}と対処することができる。太陽の大きいなる陽の直接摂取でないと、治る病気も治らない。

それが光の直接摂取が可能になると、人体内での光合成がもつと多岐にわたつて活発に行えるようになる。大袈裟^{おおげさ}に聞こえるかも知れないが、これは人類にとつて画期的なこと

である。

人における光合成は、当然のことであるが生命消長の「長」のほうに働く。生命にとつてよいことだらけの働きとなるのである。

およそ生きものにとつて、光合成が活発に行われているほうが生命力の強いことが知られる。踏まれても焼かれても蔓延する雜草。^{はびこ}千年を生きる大樹。植物のほうが動物よりも生命力が強靭なることは、偏に光合成の優劣で分かれるところである。

光合成は、植物にとつても、動物（人）にとつても、大自然の万物を生かしている摂理としての、太陽の光エネルギーの働きであることを、改めて思い起こしていただきたい。植物に比べて動物のほうが劣るその働きが、私たちの体に活発に、多岐にわたって行われるようになつたとき、どんな素晴らしいことが起こるか……。後章に詳しい。

大言壯語するつもりは毛頭ないが、以上の如き生命素の補陽の働きの波及効果は言い尽くせない。「起死回生」の語を辞典で引くと、「死にかかった病人を生き返らすこと。転じて、非常に悪い状態から良い状態に立ち戻らせること」とあるが、太陽の大きいなる陽の直接摂取は、この註釈の前段ズバリのいのちもうけにもなるし、後段の広い意味でのいのちもうけの何^{ハナ}れにもなるのである。

こうした、とてつもない生命素の補陽の働きは、延いては人生最大の命題である生老病死の四苦を超克して、安心立命を得る縁となるであろう。なぜというに、万物の平衡（物事が一方にかたよらない安定している状態）を保つてているのは陰陽の理法による。生命の平衡もまた、例外ではない。「陰多くして陽少なし」のさまざまな陰病や、生命の危急——「亡陽」は、その平衡の崩れた現象である。

太陽の大きいなる陽によって、その平衡の崩れ——陽不足を、事もなく埋めることができるとなると、生老病死に対しても苦でなく、楽に向き合うことができるのである。

